

町北の少部分は此圖にあらはれて居ない。此の岡幅の社寺に前述の消去法を行ふと、柳河町のみが寺の地域となるのみで、他は盡く神社の地域となつて了ふ。

右兒島・有明兩海灣岸では（但し前掲地形圖の示す範圍で）神社が佛閣よりも多く、此の點は伊勢灣北岸地方の場合に類似して居る。然るに沿海地方に於てさへ、佛閣の混入の少くない事は、伊勢・兒島、並に有明の三灣岸共通の現象である。

武藏野に於ける替地開墾による農村の如きでは、當初の地割を行ふと同時に佛閣の敷地が割當てられてゐた。そして神社は其れ以後に建設されてゐる。歴史的に同一の宗派關係にあつたものが集團移住をする場合には、聚落發生と同時に寺を必要とする筈である。然し武藏野の寛文年間の上述の聚落が此の關係に在つた事を直ちに立證する事は出来ない。既述した上川平野のペーバン川流域では、地形圖によつて観ると

福島團體・宮城團體、及び越中團體等の地名の示す様に、團體移住が行はれたらしいが寺は一つも見當らない。此等の諸點は其の内容の検討に俟つより他に方法がない。

以上不十分な記載に終つた觀があり、特に形態に重きを置き過ぎた事は最初にも斷つた通りで、將來日を改めて御叱正を仰ぎたいと思つてゐる。尙、五萬分の一地形圖上でなした独自の研究方法に就ては方法的吟味を要するであらうが此れも省略し、只管先輩各位の御批判を待つ次第である。（一九三六・二・一六）

新著紹介

○新疆よりゴビ沙漠を横ぎる

南滿洲鐵道株式會社
昭和十年十一月發行

本書も亦露國經濟調査會員ネグーチン夫人とネグーチナとの著述で一九一七年より一九二八年に於て新疆西北部より寧夏をへて歸綏に至る旅行記及び新疆並にゴビ沙漠横斷記である、旅行した地圖があり寫眞も出てゐる荒涼な新疆にも美しい市街もあれば景色もある文章も讀みやすい、六、七月の

酷熱に沙漠の横断だから、いかに暑熱に苦むかよくわかる午後五時又は夜に入つてから出發してゐて日中天幕の中で茹だつた様子など想像以上であるらしい。ゴビの沙地の中で、加ふるにブランといふ暴風にあひ、鹽辛い池水を飲むだり洗面しなかつたり、駱駝でなくてはとも通れる土地ではないと見える、おまけに強盗團に出逢ふ、やうやくにして歸郷に安着したうれしき、読む者も同情が出来る。(藤田)

○外蒙古地誌上下二卷

南滿洲鐵道株式會社

昭和十年十一月十二日發行

本書はイルクーツク軍管區司令部發行的「接壤地帯兵用地誌」第二卷蒙古の翻譯で參謀大尉ハルモフ編著一九一四年に出たものである、第一篇全蒙概觀第二篇東部地區概觀が上巻で下巻は喀爾喀と科布多の兩地區にわたる、歴史方面では成吉思汗以後の經歷をや、詳述し住民の分布に及び軍事的見地より見たる蒙古の經濟状態は餘程詳しくのべてある、本書の東部地區では興安嶺をこえて滿洲に出る道路交通を明にし、甘珠爾、洮南、ドロンノル等の位置を明にしてある、勿論、これはロシアからの兵用の記述であつて、滿洲からの考察でないから參考として他山の石とみるべきであらう。經濟地理としては牧畜と農作物以外に多數の鐵産もあるであらうが、それは一語も述べてないのが不十分である。

下巻の方も交通線路は詳述されてゐるが地誌の經濟的方面は牧畜と農産以外に出でない。(藤田)

○黒河の河運

昭和十年黒龍江の解氷は四月廿三日に始

まり五月五日流水開始、十一日から航行が出來た故に二十一日にハルビンから汽船が黒河港についた。黒河の河運はハルビン黒河間と、富錦黒河間上流では黒河漢河間、漢河と奇克特間、及び漢河奎華間の五線であつて、各線共專屬船を配してゐる。總數二十二隻、十年着延船數二七四隻に達し來往客二萬三千三百餘人、主として探金の苦力と出稼の江岸農民で、黒河への移出入貨物は百八萬四千布度に達しメリケン粉、雜貨を入れ、木材・木耳・紅豆・毛皮を出だす。いづれも額は少い十月二十一日哈爾濱黒河間終航、黒河奇克特は十月二十五日終航。

水運による運送費は鐵道便よりも多少低廉であるから最近汽船の利用が進んで、鐵道方面にも幾分の影響を與へるに至つた。結氷中黒河への驛到着貨物は毎月二千布度内外のものが、水運開始と共に約半減したといはれる。乗客は主として黒龍江沿岸住民及苦力の移動で、水運が開けると山東及南滿方面からの苦力の來往頻繁となる。これらの苦力はすべて鐵道で黒河に來り、それから、更らに水運でモーションをとるから、解氷期間は鐵道にのるお客の數が増加し好影響を與へる。

結氷期の黒龍江沿岸各地方は極以外の交通機關は全然杜絶